

# 守屋荒美雄と帝国書院

## 「地理教育の父」の足跡を旅する

### 第4回（最終回）青年教師の転機 東京・文京区 獨協中学・高等学校

伊藤 智章

#### 江戸川橋から獨協へ

地下鉄有楽町線の江戸川橋駅の出口から獨協中学・高校に向かう。都心にありながら驚くほど緑豊かな江戸川公園の森を神田川沿いに10分ほど歩くと、守屋荒美雄ゆかりの学校、獨協中学・高等学校の白い校舎が見えてくる（写真1・2）。図書室にお邪魔して、開校当時の史料から、旧制中学校教員時代の彼を追った。



写真1 江戸川橋から見た神田川

右側が江戸川公園。高架橋は首都高速5号池袋線



写真2 獨協中学・高等学校概観

## 青森から東京へ

明治30(1897)年4月、前年5月に行われた文検(文部省教員検定)に合格し、地理科の中学校教員資格を得た守屋荒三(荒美雄)は最初、青森県立師範学校に着任したが、夏休みにその職を辞し、同年9月に獨逸学協会学校に移籍した。青森師範学校には「夏季地理講習会」に出席する名目出張許可を得た後、東京から校長宛に辞表を郵送したため、校長が激怒して、しばらく辞職は認められなかったようだが、後任を推薦してもらうことで収めたという。荒美雄は、9月23日に獨逸学協会学校着任の辞令を受け取っている。

獨逸学協会学校は、明治16(1883)年、「沼津兵学校」など、明治初期の教育の確立に尽力した西周(にしあまね)を初代校長に設立された学校である。ドイツ人教員を招へいしてドイツ語はもとより、ドイツの法学や経済を講じ、高級官僚を多く輩出する学校として名を高めていた。

荒三を招き入れたのが、獨協中学・高校の前身、「獨逸学協会学校」の教頭(後に第4代校長)の大村仁太郎(おおむら じんたろう)(1863~1907)(写真3)である。



写真3 大村仁太郎(獨逸協会中学校の校長室にて)

(『獨協学園史 1881~2000』<sup>1)</sup>より)

学校の近く、江戸小石川生まれの幕臣の子であった大村は、維新後の明治9(1874)年、11歳で開校間もない東京外国語学校ドイツ語科に入学する。17歳で卒業すると、すぐに同校に助教授として採用された秀才である。

26歳の荒美雄が獨逸学協会中学校の門をくぐった時、教頭の大村は、若干34歳だった。写真の説明には、彼が直接採用した19人の教員の名前が添えられているが、「地理・守屋荒美雄」は、その筆頭である。当時の教員の多くは、帝国大学や高等師範学校、高等学校の教授と兼務しており、専任は少なかった。守屋荒三は、人事権を任された大村仁太郎が初めて、あるいはごく初期の頃に採用した専任教員の一人だったのだろう。

荒三が採用された年、獨逸学協会中学校は、まだ開校 4 年目の若い学校だったが、進学実績は目覚ましく、全国から学生が集まっていた。学園史によると、明治 33 年には、帝国大学への登竜門である「第一高等学校」に 42 名の合格者を出している。2 位の東京府立一中学校（30 名）、3 位の開成中学校（22 名）に大きく差をつけての全国第 1 位である（『獨協学園資料集成』より）。生徒数は、荒美雄が就職した年で 600 名。2 年後に 800 名に増やした。明治 35 年 12 月、校舎が火災に遭った際、ドイツ出張中の大村が寄付を募り、翌明治 36 年 2 月、現在地に洋館の新しい校舎が建設された（写真 4）。真新しい校舎で、荒三は地理教育に全力を注ぎつつ、ドイツ語と法学、歴史学を独学する<sup>2)</sup>。



写真 4 獨逸学協会学校の校舎  
（『獨協学園史 1881～2000』より）

明治 31（1898）年、荒三はキリスト教の洗礼を受けて名を荒美雄（すさびお）と改名した。明治 32（1899）年、漢学者の外松兼氏の長女、ちよとした。写真 5 は、明治 33 年の卒業式のものである。28 歳。まさに新進気鋭の青年教師である。



写真 5 28 歳の守屋荒美雄  
（明治 33 年の卒業式 『獨協学園史 1881～2000』より）

## 「講義録」の出版

30歳を過ぎた守屋荒美雄がその名を全国に知らしめることになったのが、彼自身も受験し、上京のきっかけとなった「文検」（文部省教員資格検定）の参考書、「講義録」の執筆である。

明治34（1901）年。東京高等師範学校教授（後に東京帝国大学教授）として地理教育史に名を残した山崎直方（やまざき なおまさ：1870～1929）がドイツ留学から帰国し、文検の出題委員に就任すると、その出題傾向ががらりと変わった。それまで、地理教授のための基礎知識や教授法を問う問題は影をひそめ、アカデミックな地理学（特にドイツ系の自然地理学）の研究動向と直結した出題になった。地形学について書かれたドイツ語の論文を読ませて訳語も定まっていないう単語を説明させる問題や、日本にはない鉱物の標本を見せてその名前を答えさせる問題などが大半を占めた。

文検受験者の多くが、かつての荒美雄と同じ地方在住の若者である。小学校教員などをしながら寸暇を惜しんで勉強を続ける彼らに、ドイツ語の原書の購入や読解を強いるのは酷である。出題者の山崎にとっては、日本の地理教育のレベルアップを図る意図があったのかもしれないが、実質的に受験の間口を狭めることにつながりかねない。寝る間も惜しんで「講義録」の執筆に没頭した荒美雄の心中には、「文検地理」制度自体の衰退への危機感があったのだろう。また、自分とさして歳も違わない（2歳年上）留学帰りの「気鋭の若手研究者」に対する対抗心もあったのかもしれない。

荒美雄の「講義録」は評判を呼び、その名は全国に知れわたる。明治37（1902）年、「講義録」の評判に注目した出版社の「六盟館」が、荒美雄に中等学校向けの地理の教科書の執筆を依頼する。当時、教科書と言えば、帝国大学や高等師範学校の教授が執筆するのが一般的で、一中等学校の教員が執筆する事は異例だった。荒美雄は現場のニーズを反映させる形で図版を増やし、人文地理学的な内容を充実させた新しい地理の教科書を世に問うた。この教科書は大ヒットし、明治38（1903）年、荒美雄は、600円の印税を手にした。彼が青森師範学校で得た初任給が25円だったというから、現在の給与水準に換算すると300～400万円ぐらいの収入である。

教科書のヒットに自信を深めた荒美雄は、自らの地理の授業の工夫に情熱を傾け、授業の中から次の教科書執筆に向けたヒントを探るようになる。単に知識を伝授するのではなく、常に新しい教材を試し、説明法を工夫しながら生徒の反応を見た上で執筆に反映させた。休み時間も職員室に戻らず、教室から教室へ嬉々として駆け抜けていたという。

夢中になって地理を教える荒美雄の授業は、生徒からも高く支持された。愛称は「守屋のおやじ」。柔道部の顧問、学級担任として、生徒のストライキ事件を談判して収束させるなど、エネルギーに活動した。

写真6は、明治40（1907）年、荒美雄が35歳で5年乙組担任として臨んだ卒業式の一コマである。大村仁太郎は病気のため、既に校長職を辞していたが、担任の荒美雄の隣、

写真の中央に納まっている。

この写真が撮影されてから4か月後の明治40（1907）年6月5日、大村仁太郎は44歳の若さでこの世を去った。

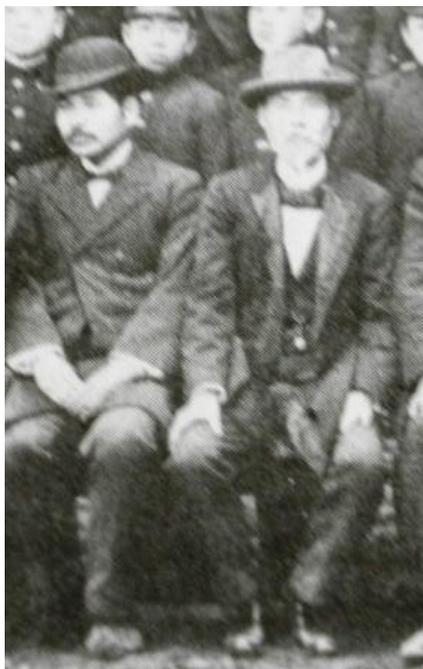


写真6 明治40年3月の修了式。大村仁太郎前校長と荒美雄  
（『獨協学園史 1881～2000』より）

## おわりに—荒美雄からの問いかけ

大村が亡くなってから4年後の明治44（1911）年、荒美雄は、14年間務めた獨逸学協会中学校を退職し、執筆活動に専念する。病身の妻の療養を兼ねて、神奈川県茅ヶ崎に拠点を移し、自身は東京と茅ヶ崎を往復する生活を送る。時には寝食の間を惜しんで執筆活動に没頭した荒美雄は、教科書だけでなく、文検受験生の定番の参考書となった千ページの大著『動的世界大地理』（大正3年）などを手掛けた。

実母、妻との死別、再婚など、私生活での大きな変化を経験した上で。大正6（1917）年、荒美雄は46歳の時に東京・麹町区（現：千代田区）飯田橋二丁目で「帝国書院」を起業した<sup>3)</sup>。以後、67歳でこの世を去るまで、著作物は合計198点にのぼった。

大正13（1924）年、51歳になった荒美雄は、全国の中等学校教員向けの小冊子、「地理學研究」を創刊した。「発刊の辞」で荒美雄は、今日の地理教育には、新聞や雑誌、官報から得られる情報をつなぎ合わせた「間に合わせの教授」が横行しているとし、「国際的な地位を高めている国の国民にふさわしい地理教育がなされていない」と断じている<sup>4)</sup>。

彼が生きた時代は、良くも悪くも「帝国」の創生期であり、日本人が海外に渡航し、異

国の地で異民族と共に暮らすのが日常化していた。荒美雄自身は、その後の「国定教科書」の強制や、15年戦争の悲惨な結末を知ることなくこの世を去っているが、生涯にわたって自ら学び、自ら書き、時には上層部と衝突しながら教えた荒美雄にとってだからこそ、時代の流れの変化を敏感に感じていたかもしれない。

100年後の今、彼の問いかけは、改めて重みを増している。グローバル化が進み、人やモノが絶え間なく国境を越え、情報はキーボードとマウスで世界中から手に入るため、教材作りはついつい「コピー&ペースト」に頼りがちである。また、検定制度の下で、教科書の内容は画一化される一方で、高等学校での地理が必修科目から外されてから久しい。これからの地理教育のあり方を考える上で、100年前の大先輩が辿った道筋と、ともすれば現代よりもはるかに自由闊達としていたと言える明治・大正の地理教育に学ぶべきところが多いのではないだろうか。

倉敷に生まれた青年が東京に出て、地理教師として大成するまでを追ったが、ひとまずここで連載を終える。今後、彼が住み暮らした場所を訪ね、彼が残した膨大な著作と向き合いながら、旅を続けて行ければと思う。

(おわり)

1) 書籍として刊行されているが、写真の多くは以下の Web サイトから閲覧することができる。

獨協中学校・高等学校同窓会「目で見る獨協百年」

[http://www.dokkyo-mejiro.com/100\\_Year/index.html](http://www.dokkyo-mejiro.com/100_Year/index.html)

2) 明治 31 (1898) 年、荒美雄は歴史科の文検に合格した。

3) その後、2 回の移転・拡張を経て、現在地には、昭和 4 年に移転した。

4) これに続きく巻頭論文として、荒美雄は「地理学上より見たる帝国の一大危機」と題した論文を寄せて、危機感を具体的に説明している。